羽衣国際大学　令和八年度入学式　式辞

本日、ここに羽衣国際大学令和八年度入学式を挙行できますことは、本学にとって大きな慶びです。

ただいま現代社会学部　二一四名、人間生活学部　一二九名、合計三四三名の入学を許可いたしました。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。またこのたび入学される新入生を育て、支えてこられたご家族、関係者の皆様も、たいへんお喜びのことと存じます。本日は、羽衣国際大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

また本日は、多くのご来賓の皆様にご臨席いただいております。常日頃より、学生たちと大学を温かく見守ってくださり、年度初めのご多忙の時期にも関わらず、本日の入学式にお越しいただきましたこと、大学を代表し、心より厚く御礼申し上げます。

さて本学は、今から百三年前の一九二三(大正十二)年に、アメリカに学ばれた島村育人先生を初め、地域の有志の方々によって設立された羽衣高等女学校を起源としています。女子に高等教育は不要であるという当時の常識に異を唱え、女性もまた豊かな教養と高度な専門知識を持った社会人とならなければならないという信念のもとに設立されました。島村育人先生は、羽衣高等女学校第一期生に大きな期待と誇りを持って、「あなたが本校に在学なさることは本校の名誉であります」という言葉をかけられました。私もまずこの言葉を新入生の皆さんに贈りたいと思います。

戦後、羽衣高等女学校は、羽衣学園中学校・高等学校となり、一九六四(昭和三九)年には羽衣学園短期大学が設立されました。その後二〇〇二(平成一四)年に短期大学を一部改組転換して、男女共学の四年制大学として設置されました。今年、大学は開学二十四年目を、そして羽衣学園は創立百三年目を迎えます。学園全体は一つの理事会・評議員会のもと、運営をされています。ここで、学園理事長の松井基純をご紹介いたします。

この羽衣学園の建学の精神は、「『愛真教育』を基盤とした『自由・自主・自律・個性尊重の人間教育』です。これを言い換えるならば、「時代の常識を疑い偏見や臆断から自由であること、つねに自主的に物事に取り組み考えること、謙虚さを持って自らを律すること、そして自ら同様に他者の個性を尊重する」人間性育成の精神です。このような人間性を備えた「これからの共生社会において主体的に行動する実践的職業人の育成」こそ、本学の目的・使命であると考えています。

世界を見渡すと、四年前に始まったロシアによるウクライナ侵攻によって、両国の多くの若者が命を落とし、さらにすでに七十年以上解決の糸口が見えないパレスチナにおいても、三年前の十月にパレスチナ自治区のガザで大規模な戦闘が始まりました。パレスチナとイスラエルの双方、特にパレスチナ人の多数が犠牲となり、ガザ地区ではほぼすべてが破壊しつくされました。加えて、一か月前には、新たにイスラエルとアメリカによるイランへの攻撃も始まりました。

古来多くの戦争が行われ、戦争の世紀といわれた二十世紀を経て、二十一世紀に入ってなお、残念ながら争いが続いているように、戦争をいかに防ぎ、平和を維持するのかは、人類共通の積年の課題です。

他者を理解し、多様な個性を尊重することは、ときに容易ではなく、同じ国で生まれ育った人同士であっても、また同じ文化をルーツとする者同士であっても、残念ながら時に激しい対立や暴力に発展することもあります。異文化に育った者同士であれば、なおのこと難しく感じることもあるでしょう。悪意を持って策略を巡らせるなどは論外ですが、たとえ善意に基づいてまわりの人を思いやる場合でも、その表現の仕方が異なることで、思わぬ誤解が生じ、対立に発展してしまうことさえあります。

本学では、二十四年前の開学当初から多くの留学生が学び、社会に巣立ちました。今日もまた故郷を遠く離れ、ここ羽衣の地で学ぶ意欲を胸にした多くの留学生を、本学の一員として迎えることができました。新入生の皆さんには、国籍を問わず学生同士の交流を深め、文化的背景の異なる友人を見

つけてくれることを願っています。そして自らの文化と異文化において大切にされてきた価値を理解して、開かれた精神で他者の思いを想像できる力を持った人になってほしいと願っています。

暴力の究極の形である戦争状態を避けるためにも、自らと周り、そして自分を育んでくれた文化、そしてそれとは異なる国や地域の文化の中で生まれ育った人々との相互理解を進める必要がありますが、円滑な相互理解を妨げるものの一つに、ステレオタイプがあります。ステレオタイプとは簡単に言えば、固定観念や思い込み、偏見を指します。十九世紀末に、ドイツ・ユダヤ系移民の三世としてアメリカ合衆国ニューヨークのマンハッタンに生まれ、ジャーナリスト、政治学者、そして思想家として活躍したウォルター・リップマンが初めて使用した用語です。リップマンは、第一次世界大戦後にアメリカ大統領ウィルソンが発表し、のちに国際連盟設立のきっかけとなった、いわゆる十四条の原則のうち八か条分の原案を執筆したことでも知られています。しかしながら、その後の歴史は、平和構築に向けて献身的に努力した彼の思いとは裏腹に、第二次世界大戦へと進んでいきました。

彼がこれら二つの大戦の間である戦間期に著した代表作『世論』において、「われわれはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。外界の、大きくて、盛んで、騒がしい混とん状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれのために定義してくれているものを拾い上げる。そしてこうして拾い上げたものを、われわれの文化によってステレオタイプ化されたかたちのままで知覚しがちである」（リップマン『世論』岩波文庫）と述べています。そして、ある心理学会の会場で発生した、ピストルを持った二人が乱入し、発砲して逃げ去るという事件について書いています。この乱入事件は、実は実験のための演出でしたが、会場にいた、心理学の訓練を受けた専門家たち四十名に報告書を書いてもらったところ、過半数に達する人々が実際には起こってもいない場面を含めて「描写」していたそうです。つまり起こってもいない場面を見ていたことになりますが、なぜそのようなことが起こったのでしょうか。リップマンは、その場にいた人々はみなこれまでの人生で、大騒ぎというものについて様々なイメージを頭に入れてしまっており、こういったイメージ群が実際に目の前で起こった事柄にとって代わってしまったのだと述べています。専門的な訓練を受けた人々でさえそうだったのですから、訓練を受けていない私たちの多くは、もっと気をつける必要があるでしょう。

今日から始まる四年間は、ほとんどの新入生にとって、自分の疑問を自由に追求できるまとまった機会としては、社会に出る直前の最後の貴重な時間です。大学での学びは、すでに確立した知識を一方的に受け取るだけの学びではありません。高校までの、ともすれば受け身になりがちであった学びの姿勢をリセットして、さまざまなことについて「そういうもの」として受け流すのではなく、一歩立ち止まって「なぜ、そうなのか」と自由に疑問を持ち、自らの手でひとつひとつの疑問を丹念に追求してください。そして、ぜひ表面的な現象やステレオタイプ、先入観などにとらわれず、物事の本質を見極め、「より幅広い人々が共生できる社会」の構築に資する新たな価値を創りあげる基礎力を養ってほしいと思います。

教員と学生の間で、そして学生同士で学び合う場である大学で、今日からの四年間を活用して、自らの考えを培い、自分自身の未来像を描き、大きく変化する時代に力強く羽ばたく力を養ってください。

在学中には、地域、企業、自治体などと連携した学外での学びや海外への留学など、オフ・キャンパスで学ぶ機会をぜひ活用して、日常生活では触れにくい現実に接し、広い世界を自らの目でみて、実感してほしいと思います。

さまざまな専門分野で研究や活動を実践する教員や、皆さんの学生生活全般を支援する職員が、ともに皆さんの成長を心から願っています。

新入生の皆さんが本学入学をご自身の新たな出発点とし、これからの共生社会を創造し、主体的に行動する実践的職業人として、個性豊かに成長されることを祈念し、入学式の式辞といたします。

令和八年四月二日

羽衣国際大学学長　中川　恵